

総 括

— 特に、今後の研究課題に向けて —

まとめは、各章の終りにそれぞれ試みられているので、ここでは、これを受けて本研究の成果を踏まえ、今後の課題を方法論的視点に立って総括することにした。

1. 第Ⅰ部について

第Ⅰ部の諸研究は、授業研究のバックデータとしても活用される重要な研究である。

第1章の学生の「身体的データ」のうち、身体内部の諸機能に関する資料は保健管理センターに、体力・運動能力に関する資料は体育センターに温存されているので、これらの資料内容につき検討し、不十分な資料は補足するなりして有効度の高い資料項目の抽出と利用可能な方法を導出していくことが必要である。

第1章で明らかにされた内容に着目すれば、

身体面では、体重・皮脂厚の増加に伴って瞬発力の低下が認められ、また、一般体育系サークルに所属する部員は、他の一般学生に比し運動能力で勝れている事実などからすれば、週一回の正課体育の効果が課外スポーツ活動に波及していくような指導内容・方法の検討が必要になるであろう。これは、スポーツによる規範性や社会性の育成、態度や習慣形成を志向したスポーツ指導が有効であることを示唆しているものと考えられる。

元来、体育では、自分の体や運動能力の程度について認識させることがまず必要であるが、これには他者との比較において認識させることがひとつのよい方法である。本研究で試みられた体育専門学生の身体形態・運動能力の判定基準の作成は、一般学生にも自らのそれを位置づけするに当て参考となるであろうし、これがまた運動意欲への喚起にも連がることであろう。本研究で明らかにしようとして果せなかった本学と他大学の学生との比較考察については、本学の実技4単位実施の可否を世に問うとともに、授業のあり方を検討するためにも、早い機会にまとめを試みる必要がある。

第2章「精神的データ」に関連するこの種の資料は、本学においては個別的・事例的資料を除いてまとまったものはないと思われるし、また、体育・スポーツ心理学の領域でも、この種の研究は要因が把握し難いこと、要因の捕捉に統計的処理を要することなどのために、最もおこなわれている研究分野の一つである。

それだけに、本研究においても必要な項目の検索や項目間の関係を明らかにしていくに、多大の時間と労力を費消した領域である。

今回もなお、概念的モデルの域を出ていない憾みはあるにせよ、第1報の精神的データシステムのフローに修正を加え、そこで考えられる本学学生のラフな学生像のプロフィールが写像されている。今後は、スポーツ活動と関わる精神的要因の捕捉・検定と授業研究や学生の体力・スポーツ相

談などに生かせる具体的方法を創出するにある。なお、各学群に温存されている知的教科の学力や学習状況に関する資料、学担室で実施される「学生の生活調査」などの資料も検討に値するであろう。

第3章「スポーツ施設の実態とその活用」では、大学のキャンパスの広さ、大学の構成員数・構成員の週わり身体活動の現況・年間の雨（霜）日数などから、本学スポーツ施設基準の算定を試みた。

この結果、多目的に使用可能な二万 m^2 余のフィールドハウス、野外活動施設（ボート・ヨットなどの艇庫・登山壁など）、ライフル射撃場、ミニゴルフ場、合宿所の増築などの設置の必要性が改めて確認され、また、これら施設の管理要員の補充やランニングコストの確保の必要性も明らかにされた。当初、意図したこの種の研究は、これによって一応の結末をみたといえるが、今後は、これらの施設の運用組織や運用法についても検討する必要がある。

2. 第Ⅱ部について

第1章 「正課体育の授業研究と授業分析」

授業研究は、(1) 教師の授業時の経験や直感力を基礎とする経験的知識 (2) 教材の理解力や解釈力 (3) この直感的・経験的知識に基づく授業過程——結果の観察 (4) 組織的観察から得られる知識 (5) 調査や実験などによって行われるが、本研究は、(1)の教師の経験的知識に基づき、(5)の調査を若干適用することによって研究が進められた。また、これと平行して授業分析の研究手法の開発にも努力が払われた。

また、授業そのものに着目すれば、授業は、通常次の4つの要因の相互関係からなりたっている。すなわち

1. 教師（陶冶意図）
2. 教材（陶冶内容・含原理・教授形態・教授の取り扱い・補助手段）
3. 学習者（運動様式や運動欲求・含運動の要素・感覚運動的学習・学習のレベルや進歩・動機づけ）
4. 教授目標（陶冶課題、実質的目標——教育意図と運動意図、形式的目標——学習者の運動能力の発展）であり、この4つの条件を限定して始めて方法が決定するのだし、陶冶内容が具体化すればするほど、方法も具体化する。

教師についていえば、教師は、教材と学習者と教授目標をいかに統合化するかに腐心する。これはつまり、教師が「陶冶意図の分類」を試みることでもある。統合化は、最終的には教授目標に結びつき、体育の教育的可能性を抜き出し、陶冶手段としての身体運動をさらに生かすことになる。

そして、このような統合化の中で行われる生きた授業こそ「よい授業」といわれるものになるのであって、また、このような立場から、学習者の心身の特性に目を向けてはじめて、I部で明らかにしようと試みつつある学生の身体的・精神的・社会的構成要素から構成される身体運動について、どのような授業行動が教師にとって教育的であるのかが判明してくるものといえるであろう。

上述の内容からも解るように、授業研究は、方法や資料から始まるのではなく、問題から始まるのである。

これを図34で示すと、独語圏における方法（論）は教授（学）の1つのディメンションないし側面として捕えられており、教育から教授に近づくにつれて方法にアクセントが加わり、したがって、授業は、極めて方法的色彩を濃厚に帯びてくる。そして、その科学的知見は、個別専門方法学によ

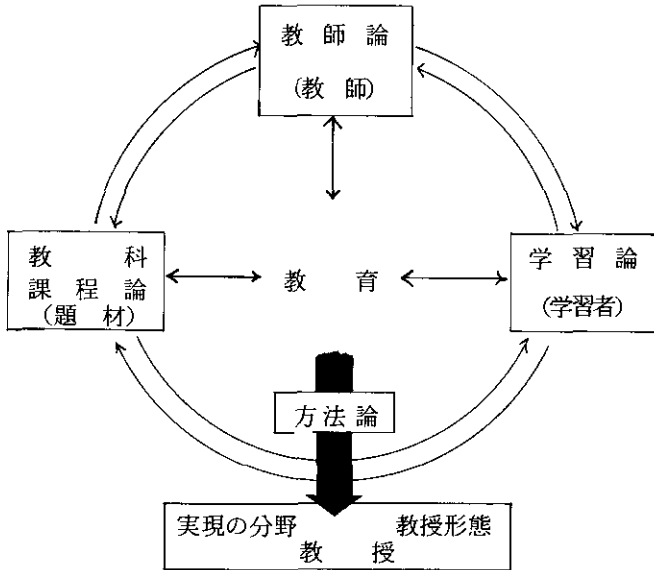


図34 教育—教授過程の構造

って提供されるのであるが、とかく授業というものは、この点で方法（指導法）が支配的になり、その影に問題意識が陰れてしまい勝ちになるものなのである。特に、体育の授業では、この点に留意しなければならないであろう。このことは、今後本研究を進める上でも留意しなければならない重要な視点である。

かくて、最後の教授（授業）段階（図34）では、計画性や教授形態が問題になる。そして、これらの問題は、段階性・個別化・経済化の諸原則の統合野として秩序整然と展開されていくことになる。このような教授過程はまた、教師の精神の展開過程でもあるので、この過程のシステムを構成する教師サイドの要因の検索・抽出についても、さらにまた、教師の抱く正課体育の陶冶目標やスポーツ種目の教育学的構造の把握についても今後の重要な研究課題としなければならないであろう。

付録「開設科目指導事例」では、今年度の授業研究のねらいが、学生の抱く不安状況を体育の授業場面において（対人関係の中で）、いかに解消させるかの要因の析出におかれていたので、ここで提示された事例が、例えば、図35に示されるような「体育授業における抑圧」の一般モデルを構想し、それから、学生の学習行動が彼等個々人の病跡的体育体験や現行の種目選択、教師の指導技

術などによって、どれほど変容するかなどといった視角から、それを教師各自で集約・モデル化して提示すれば、さらに一層、第Ⅱ部・第1章のテーマに深みと巾をもたせるとともに、今後の研

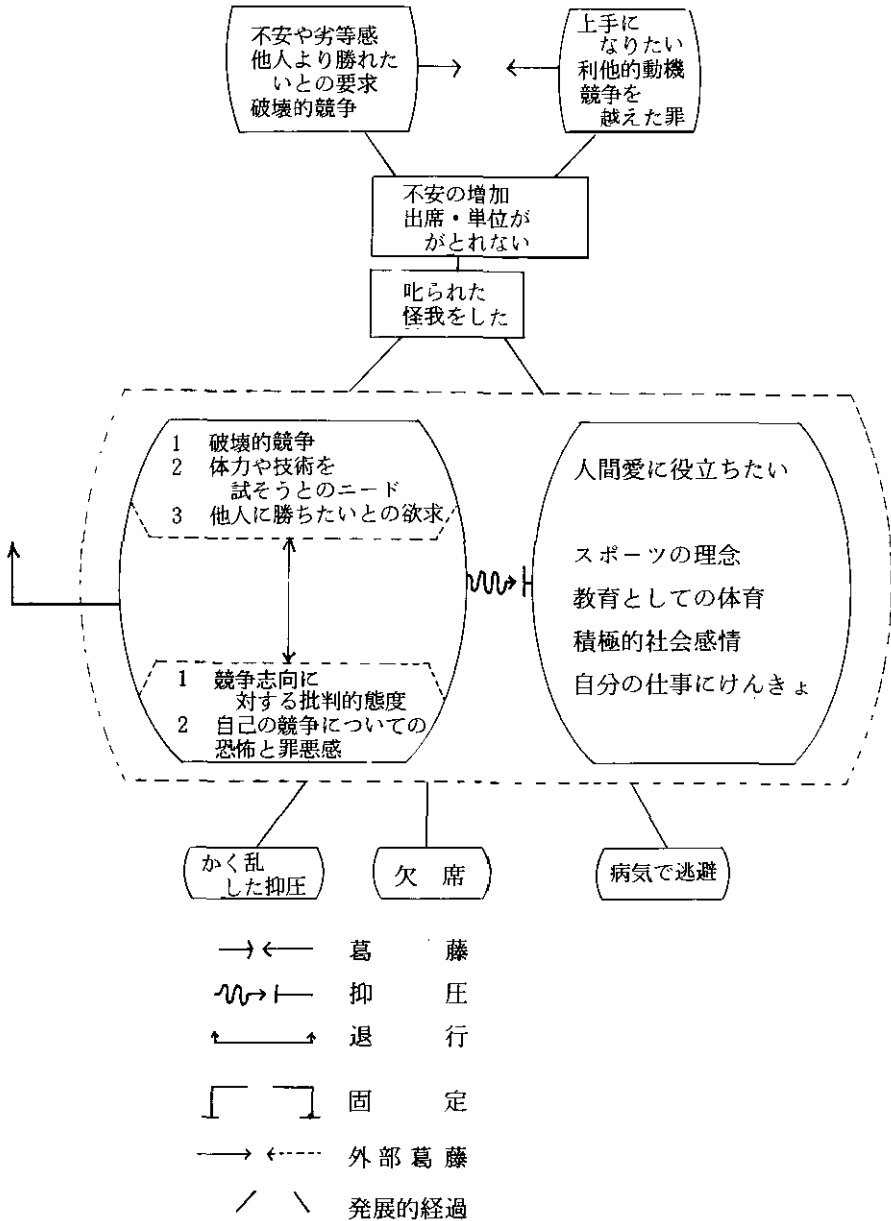


図35 学生の体育授業における抑圧

究にも少なからず裨益しえたことであろう。

要するに、ここでは（第1章と付録では）、今後の授業研究がより大きく統一性を保った方向に進展するようにとの願いから、本研究で欠落し勝ちだった教育——授業過程で生ずる原則的なことながらとそれらの条件間を巡る若干の諸問題やその解釈に触れたわけである。

第2章「正課体育のガイダンス・マニュアル」は、現行の共通体育で実施している内容を、学生に具体的に周知徹底させるために、手引書として要領よくまとめたものであり、いわば、学生が履習上知っておかねばならないミニマム・エッセンシャルズの集録である。

このガイダンス・マニュアルが、学生達に生きて機能するためには、このプロジェクト研究が進捗するにつれて、トータルシステムのサブシステム内の諸要因が確証、具体化されて整理され、その結果、新しいマニュアルとして改訂されたものが、授業過程を通じて学生達にいかにか活用され、彼等のスポーツ実践にどれほど生かされるかにいつにかかっている。

この意味では、このマニュアルは、本研究の結実点となるものであり、また、次の研究の資料ともなるものである。